



円錐形の創りは建築家・黒川紀章氏の設計で氷山をイメージ。周りの建物お祭師家のチームワークを表現している



白瀬の名を冠した現在の南極観測船「しらせ」

白瀬スピリットを後世に伝え地域づくりを展開（金浦町）

明治の末期、南極点を目指し想像を絶する忍耐と努力を重ねた郷土の偉人、白瀬中尉の魂・精神を後世に伝える「白瀬南極探検隊記念館」。リノコリアルされたこの教育の拠点施設を中心に、地域振興策、国際交流が推進されています。

南極探検に生きた白瀬のぶと地域住民の想い

県の西南端に位置し、雪峰鳥海山北西のすそ野にあり、西は日本海に面する金浦町。沿岸の暖流（対馬海流）により、平均気温が13度と県内で最も温暖な地帯であり、最も早く桜の便りが届く名所でもあります。

この金浦町、町民に郷土の偉人は誰かと問えば、幼い子供ですら間違いないでなく挙げるのが、明治末期に日本人初の南極探検を成し遂げた白瀬中尉です。南極探検に

かけたその生涯は、様々な苦難を乗り越えての忍耐と努力の人生でありました。

白瀬中尉が没して十数余年が経った昭和30年代、地球観測に伴う南極観測が注目されるようになり、白瀬の偉業がクローズアップされ、記念館建設の気運が高まりますが、町の厳しい財政事情もありなかなか実現されませんでした。その間、町の若者らで組織する「白瀬中尉を甦らせる会」や、地域住民らによる運動・働きかけなどにより建設の気運が盛り上がり、一方、町でも住民の想いに応えるために経費節減等に努めます。

そして平成2年4月、これまで積み立てた建設基金と地方債などを活用して町民待望の「白瀬南極探検隊記念館」がオープンしました。

白瀬スピリットを 後世に伝える取り組み

町では、この白瀬記念館を県内広域観光の中継基地としての位置付けをしています。むしろ青少年をはじめとする地域の住民の教育施設であることに重きを置き、採算ベースではなく町民の誇りである「白瀬スピリット」を後世に伝える拠点施設として位置付け。これまで多くの地域振興策等交流事業に取り組んで来てい

ます。

まず、地域振興面では、白瀬隊が日章旗を大和雪原に立てた日を記念して、毎年1月28日に当時は体験する「雪中行進」や、白瀬にまつわるおまつりで毎年様々な企画で賑わう「白瀬フェア」等白瀬に関する各種イベントを開催してきました。

国際交流では、平成3年、白瀬ゆかりの地「ニュージーランド・クライストチャーチ」にあるカンタベリー博物館で開

催された「南極展」に白瀬コーナーを出展したのを皮切りに、同博物館との姉妹提携を

実現、ニュージーランド・オーストラリアへの町民らによる研修視察や、ニュージーランドの中学生と町の中学生による交換ホームステイを実施しています。

さらには、白瀬が立ち寄ったウェリントンに港に記念碑（銘板）を設置したほか、昨年は白瀬が6カ月に及ぶキャンプ生活をしたシドニーのウ

探検家・白瀬^{のぶ}轟の功績



南極探検時の白瀬中尉

少年時代に「北極」の話聞き探検家（北極探検）を志す。寺の長男であったが「僧職にあっては探検ができない」と軍人を志願、将来の北極探検に備え、何人もの犠牲者と共に生死を分ける探検となった「千島探検」を経験。明治42年、北極点を米国の探検家に踏破されたため、目標を南極探検へと転換。明治43年、政府に南極探検の援助を要請、予算はついたものの全く支給されず、結局一般からの募金と借金で探検に向かうことに。

時の元帥東郷平八郎によって「開南丸」と命名されたわずか204tの小さな帆船は、隊員27名を乗せ東京芝浦を出港。途中、食料物資調達のためニュージーランドのウェリントンに寄港、一路南極を目指したが南氷洋で氷海に前進を阻まれ、オーストラリアのシドニーで約6ヶ月間仮小屋とテント生活を送りながら南極の夏を待つことに。明治44年12月14日、南極点はアムンセン隊に踏破され、スコット隊もそれに続く（帰途、全員遭難死）。

一方白瀬隊は、南極ホエール湾に到着。白瀬以下5名の突進隊で南極点に向かい出発するが、氷点下20度前後の厳しい寒気とブリザードで、走行9日目、走行距離282km地点で遂に力尽き、氷原突破を断念。明治45年1月28日、午後0時20分、南緯80度05分の地点に日章旗を立て、一帯の大雪原を「大和雪原」と命名。一人の犠牲者も出さなかったものの、志半ばで帰国の途につく。白瀬の活躍は本国に伝えられ1年7カ月に及ぶ長旅を終えて芝浦に帰港した際には、5万人余の市民から熱狂的な歓待を受ける。

辞世の歌として詠んだ「我無くも必ず捜せ南極の地中の宝世にいたすまで」の魂は、現在の南極観測の礎となって現南極観測船「しらせ」に受け継がれています。



デジタルビデオプロジェクターによるオーロラ映像

「さしいミュージアム」をコンセプトに、施設のバリアフリー化を図り、段差の解消、スロープなどの取り付けは勿論展示物や掲示パネルを、車椅子の方や子供たちの目の高さに合わせて、見やすくするための配慮をしております。

その他、デジタル方式の最新ビデオプロジェクターのリアルなオーロラ映像や、南極の生い立ちをCGで再現した「南極創世記」なども新たに上映されています。

白瀬記念館を核とし、郷土偉人の功績を活用した金浦町の地域づくりは、これからも続けられることでしょう。

ともすれば、上辺だけ、一方通行になってしまつ国際交流が多い中、金浦町は、真の交流を継続して取り組むことによって地域づくりを展開しています。

リニューアルの目玉は来館者にやさしいバリアフリー

白瀬記念館は、14年目迎えてこの3月22日リニューアルオープンしました。

特に力を注いだ点は、「高齢者や身障者、子供たち」に



展示内容も一新 来館者にやさしくリニューアルされた館内